# 近世説美少年録

三編 五

へ13
3567
15

# 近世説美少年録第三輯巻之五

東都　曲亭主人編次

## 第十九回　諫を遺して景市西都に赴く　壁を分ちて黄金陳行を辞ふ

却説黄金は出るとも和泉の左界に赴きて母黨の大叔父なりける船積荷三太許寓居る程に主人夫婦の所望によりて這年の冬十二月その子桟太郎に妻せたる遺嫁の儲は一金でも費さず及びて居るなる豪家の媳婦になりけり抑件屋の主人船積荷三太に両個の児子あり件の桟太は次郎なれども正妻雄波の腹なりければ軈て總領に立られたり太郎は則城藏なりしが是は庶子なりければ貶して二男にしたるなり又城藏が実母は日來妻に身の暇を取せて近御なる小賈某乙の妻に做したるが幾程もなく身まかりけり現天道は盈るを虧く桟太郎は富る家の總領にて生れしかども心ざま



門 へ 13 號 3567 巻 15
早稲田大學図書館 昭 34.6.3 受 蔵書

ひと愚にて菽麥だにも辨識らず目にハ才よ五色をわかち耳にハ寒暑を覚しのみなりしが。是より黄金が不得意なりし他を娶りし次の年枝太郎ハ年廿一にて疱瘡を患て危かりしを。良醫の匙に救れて命だけハ取留たれども相貌醜かりけり眼包引吊鼻ハ歪て肌膚ハ炙火卵を炙過して焦せし似く声頻嗄れて鼻へ漏る。三十二相一箇として欠ぬ處もなくなりたれバ黄金ハいとゞ浅ましと思ひけれど親里ハ昔にも似ず零落たるを知れバ這里を出て外に一個の親にものをいひかけべき再富饒なる人の妻となるよりハ悔しくて世の胡盧ともなるの女ならば左ても右ても這身の薄命。良人ハ痴漢でも醜郎でも手鍋引提ぬ常綺羅で。數の奴婢を使ふといへバ痛苦忻く身の為に炙灼て鈔子山とも出の字を巳るに優よらじと尋思をなし初に変らで陽だけハ睦しげに萬良人に機を屬てその足らざるを補ひければ。船積の二親ハ欲ぶ上大く。あくまで俺が媳婦ハ尚弱なれども今の浮世にヨヲくありがたき貞女にてそと窃に稱て願ハくハ早く初孫を産出せかしとまくも欲しい急ぐ朝な夕まで子宝に祈る親心。神ならぬ身の情由知らで閨の空枕背合せる妹と夫が。くされ縁片宿癖つく耳朶の疼みを悟るよしもあらね荷三太が妻の雄波ハ年来血暈の持病ありし是より又餘病發りて目を病煩ふ上に一捻あまり書ハ日影の厭しがゆゑに夜ハ目物せんるに克はぬ近属ハ又逆上まして耳さへ疎くなりしかバ旦暮奥に籠りて家内の事ハしもひとりの拾まで黄金に任して心安しと思ひしに又荷三太ハ枝太郎が心ざまの鈍なるを知れども片羽なる子ハ不便さの弥増る夜の鶴の脛断まく惜しき恩愛の兎も角とてもあるとも何れハ只祈々に教訓して役に立んと欲するのに然るによりて這春ハ周防の山口へ枝て到て大内殿へ見参を請まつらんとて親子共侶正月の初旬に首途しけるが且交易買賣の所要を兼る旅なれバ那地の枝店に逗留して春闌るまで帰り来ずその際左界る店舗にハ主管あり居宅ハ二男城藏に預措て内外の差配を任せしに城藏ハ兄に似ず今茲ハ二十五歳なるべし男態苦味ありて奴婢の長と做まに宜く辯舌水れ

流るゝ如く浮薄なれども應對よく人の機を覺りしかバ日毎に親の名代に得意を武家をうち巡りしが其所要を兼るに諸家の評判よろしく他ハ親にも優れりと毎より利潤多りけり却是より景市が浮宝屋の居宅なる容房及朱之介に其銘占る福富氏の慾に迷ふて自滅を取りしぞその跡既に零落したる絆の顛末送も長物語なぞあれ當下又景市ハ朱之介に其くやう福富氏の滅亡し時俺が年十七なりけるが額髮だにまだ剃らざ這里へ来て後よりそ稍男なりしかれど未小猴子なれバ棒ぶれうる那折々に竊しる金ハ僅に二三十両その年の冬阿鍵刀祢の安否を問へとて福富村へ遣られけるに恰冬時京師に旅宿して一夕柳巷壮観より忽地に病着て遊女の為に那金を夢の似く使果して又身ひとつになりしハ西へも東へも振ぐ方なし又這里に歌舟内外の機通問と名る楫でも底下に誘引水もなく其を慰る友綱もなくて過せし満三年料らず長兄と對面の這春宵ハ一刻千金散がなくても味酒の三輪の謡曲にあらねども書てきかさる夜を深も再會湯の即效ぞ睽の生てる欝悶胸を塵も残さで漏らしつゝ且飲且と献夫盃を朱之介ハ取抗ながら數番嗟歎して然いふやう福富公翁の慾に耽りて可惜し福富も栄も五十年家さへ身さへ一炊の黄粱夢物がたりになるらんとハ袷といひ恰と云世の相似て對せる奇事なれども既に詰せしまでく俺が兄前五郎に謀られも福富翁の舌命とやらんに哄されしも亦到底は皆騙姦の手段なぞその圏套に入てくるといへバ景市頭を掉て只一向にさのみ欲する像くなしもあらんが其の趣同じからぞもそはぞと推ても思へ色に迷ふて密通財を使ふハ凡世間の後生にヨヌ多れバ長兄が安保に謀られしも惜らハあらねどその所為又福富の術に足る貪欲の致す所那騙姦に遭ぞとも既にすでに一千金を騙拐られしと悟るぞ密夫の隆て二東夜の金を添しハ阿鏡へ總て世の吝嗇家の驕奢を好む心から濫を貪らるるの稀へ然しバとて貴色ハ財の惜しげに措て講ずる又云もあ貴有る第一に家々が怕しからぬ

そらの慾も竟に果さバそを生てかゝるも鈔を使いて竊せんとて薄情なる人の妻妾の。羽翁に網絹ぞて意外の銭を他が随意豪家奪らるゝハ原是鄙吝の算盤錯誤。長兄の術に比ぶれバ雲壌の差別あり。豈同日の論ならんや是よりて彼此の情状虚実を猜するに奥有とならんハ実情あり。譬ハ猫児が主の為に鼠を捉て喫ふが如し。素より主の為なれども好む所に高味あり。雖然猝の敗に及びて勢ひせんかたなく随に遂に良人と併びならん。又笠削五郎も偽をりて。他ハ根生の騙賊にあらん。長兄の盤纏の事恐らくは猛可に起りし悪心なれバ。損ありとも饒すべし。又小槌ハ実情あり。譬ハ猴が狙公の為に勉て舞踏るが如し。観者ハ皆愛れども素より他が得意にあらざれバその情をよく知るべき。又舌剣の鐵屑ハ最怕るべき奸賊也。初よりして豪家の財を騙奪んと欲する伎倆あり。福富一人に限らねど運多くてその騙術に乗せられるハ定めて所以あり。笠削五郎ハ手の侍にあらざれバ暁得て損せざるとも那奴ハ決して饒すべからず。





況一千三百金を公然として掠奪る。その罪阿保と廷逕あり。當下ハ知らずも俺が臆度をも評する処かくのごとし。然ハあらじやと説諭ます朱文仇ちが領え俺ハけまそ那奥家が宿変をとるを怨しと思ひハ浅慮にて和主の論しハ高論なるも凡作ハ横死して殃逃亡せし狡猾山客に跟られて命を其処に隕しなば浅に憐むべきにあらず。そとやも景市尉にて蚊島津の生死存亡ハ咱们も知るよしなけれども他が観音寺へ首途の折ハ咱们ハ任を別れ善き辞の端に机言らまぞ免慮ふとの古語もあるなれども。とにかくにて後をのみけ見えなるを思へバ連係の累を怕れて逃る事ん。盤纏の事寡ならねども虚庄をとくく山客の為に死なバ男子にあらず。那折ハ阿鉄も刀自もとゞ小忠二ハ夫婦に蚊島津ハ横死なるらんと菩提を弔れし事情の後ハ這里へも一夜来て傍痛くありしをこゝを見へ朱文公ハ又領を謂なければ然もあれんそのまゝなれどもあれ黄金が這里を媳婦ふるずしハ。是第一の異聞なりて和主の汲引によりて相見ることのあるべし。窒六ハ景市倉太々左右もあるべき。唱们ハ翌の朝船に乗て周防へ赴くとて要なき朱文公ハ此よりさそとその名を摘

鬼ならまだ甚なる故ぞと問ば景市これ〳〵とよ鵜鬼ぢやないかい。その山口の枝店より東人の
書翰到着して這春は當所も温疫の流行病にて折から主管も小廝們まで八分迄病臥
たれば枝店の生活不便ゆゑ景市は游客なれば西個の小廝と共に早く出船して奔走をして由
斷なく来着せよとの故に俺も亦速にかへりがてら城蔵這だまでも召連て快くせよとあれば
唱們も猛丈夫に差添て三四個の猴子と共に翌の日朝な首途の准備は既に整すなる長兄の
這首へ來ましても一日遅くば再會の機も知らず猶何時までか迭に知らであるべく少し料らず對
面の歓び。盡も間なく袂を分ば這便をまた爭何はせん今宵は既に更闌ぬれば御新娘に告
るに由なく翌の首途の早ければ起出らるゝと候間なし這義を猜し給へかしと告れて有理とおもふに
朱之介は困じ果て沈吟ずるを半晌ばかり思ひ難てる頭を捫て和主も豫て知れる如く俺と黄金
兄妹の約束せられしより出ゝあるまゝ相別れてより八九年舊縁なれども嫣びてぞ思ひあけれど這里へ來て
見れば情いふは本意なるに什麼のかしと可らんやと眉根を顰めて相譚へば景市然いへとうち

笑ていふやう然もありなん唱們は没しあぐければなる程又便宜よろしからねど這里の奥を漁路
と喚做も一個の粮娘あり他は御新娘の意に悖も鐵妾なるも優も出頭ぬ唱們と些の情
由あれば翌は夙めて起出て私に首途を目送るならん其折他に長兄のうへを耳語示しあるべし
さして奥へ通達致させん漁路が橋を渡まで心長閑げに候なへ然とて隠もるゝにあらず最も
長兄が母御と倶に周防へ赴きし折福富夫婦阿鍊の了自まで黄金と長兄は妹品にと約
束しゝ不空ともいへ酌されし縁故は唱們が折々出て噂とする由のよしなれば這里でも知らぬものはなし。
又只這意味のみならで姑嬢は耳疎く目も亦みえねば無で竜て鳥を追ふ對手の母に毒に似
たる廢人なれば黄金刀称は對面の折そこらは影護れるのみ又城跡は親の外代目より出仕
るもなければ後安きに似たれども親ミ過ぎての策一は黄金刀称の為ならず漁路が進退ますべく
對面はたゞ一兩度も買んと欲する東西整へば大和へ還りなんかしと辞せらく真実ならで又他事も
ある密談は朱之介異議もなく然ば満面笑を含て然る趣なるならん情麗からも宜く頼むのミ。

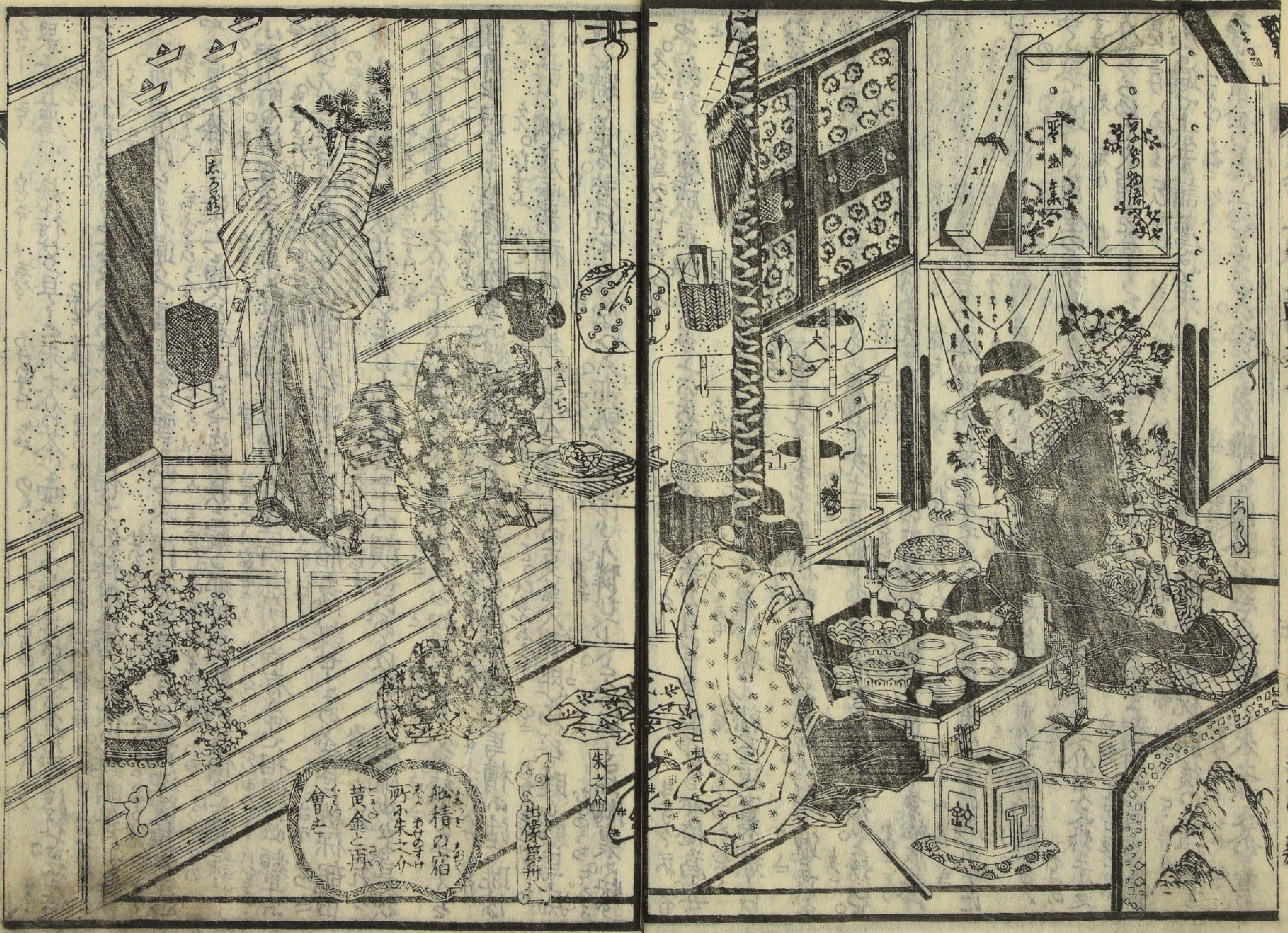
勿論女子はあるまじけれど俺が大和なる杣木氏の女婿なりと言ふ事は誰にも秘しておかれよ只本意なきは異姓の兄弟九ケ年以来相別れて再會は這一夕我願ふのみなくかくて來て世に落着ぬ俺與子商量敵にあるまじとはいへ又景市も愀然として嗟歎に堪ざりけり長兄が周防なる山口へとて首途の折から咱們と此作と倶に送りて別を惜みし今は咱們が周防なる山口へとて赴けば長兄に別を惜む事は同じ事なり中にも辟刀く那里は劍の山口我是より往ずに發迹て竟に宝の山口とならんよりある程前知あるべき人間萬事塞翁が馬の足搔なり譬へば月は立とも虧くとも春秋に富されば後會は又なしともいはれん那大和なる人贅のことは誰も知らねば俺はなれど口走らじと馬脚を露しぬなと辭を放ちて勵せば朱之介は忽地悟りて然は離合必時あり縱賢弟は周防なる枝店にて日を累ねども俺は武藏へ還去らば和主が天の一方に歎くとも是よりの別れ舟行の無異を祈るのみと視せば景市頷きて翌の首途に伴侶あれば再別ぬ告もて暁るけて立出ん後會の折もあらば送れる意中を殷に述べしとて間も中房なる土



主の辭するを儘れば夜は尤や八鼓あまりなりける景市四下を見かへりて被も今宵を夜の短さよ。與に乗せし長物語に更闌ぬれば小廝們は饒されて先に就寝りけん長兄も休らひ給ひねといひて自ら手燭をとりて遠く退きぬる程なく夜具を出し來て臥蓐を儲告別してその身は子舎へ罷る程に朱之介は鐵番と共に欽び述労ひ浄身に立て黒本粘の屏風を遶らし建輪して臥く枕に就きけり却説その暁に景市は三四個の小廝們と共に行装を整へて左界の港口へ赴きて周防へ還る船に附て西を投て走らせける又朱之介は小夜深て睡りければ貪宿くて其頭の日に掛念ず日は高く昇りて起出て肚裏に思ふやう黄金に對面せん折に些の土宜を齎さずは當座の思付ならず其も何がな贈る綾も錦も高麗物も商賣柄で珍しからん又玳瑁の櫛笄白銀の簪も皆高麗物に隷く東西にあれば珍しげなく思れん要こそあらめと尋思して且早飯をたうべて後街衢に立出て料紙を求めんとて修善寺紙鼻紙に陸奥紙すなわち歌繪を画たる紈扇と共に

總て三種價を數へて三具一對皆極品を購求て檀紙に裹せ紅白なる水引の紙撚を
締て名字を寫し袖に抱て遽しくかへり來つ又客房に獨在る漁路が出て來る歟とて起て
見居て見候不樂て果ハ欠伸に涙呑む睡氣覺しに隔亮を開て鄰坐席を見其せなる
花も丹楓も浪速なる浦の苫屋の秋なる長き春の日傾きて下晡になるまで浩然奥の
かたより年十七八可なる一個の女子出て來つ是則漁路が朱之介にうち對ひ恭しく額つきて
おん容さる長き日ぐらしさぞ徒然にましまさめ景市主の徒々とのあれにおん身のうへを具に
知得たまひて獨那人のみならで賤妾が主にも兄君にてませしものを外々しくうち過て礼ね
かりしハ奥と西亭と隔りて皆も遐き故なれバなりで允させ給へ則よとて新奥をもて迎えあげ
侍りしかバ驚きて來ますぞよおん歡びハ限りもなく候はんずれバ義兄の君の來ませしの付麼
夢ばかりもまだ見ず對面せまくほりおん案内させよかしと宣へせしによりて奉迎にまかり侍
る也と告るを朱之介ハ會釋しながら膝を找めて原来おん身ハ漁路刀禰景市の嫡

子て縁起某歴咸の表知恙もなくていとめでたし獨黄金の力自のみにておん身も亦俺爲に女
弟とよふも怪しからねど這義によりて故意なく後々までも憑しからん就て這一裹ハ聊け
れど東西なれど上るハ御新娘へ一箇ハおん身にまゐらする折敷に代て賓にまゐらせよかしとて遽に斯を
受取て些ひ子なく賤妾にさへ是ろ屬れし土宜の既にもの最有がたう戴き侍りと歡びて
猶さまざま推て誘とだくのに先に立つけふよりしての友鵆がひ熟けん長廊下なる船底張
板畳拭磨きて塵もなき春の漁路に引れゆく朱之介ハ既にして黄金が便室の頭に来に
けり登時漁路ハ朱之介を程よき處に留置て走りて納戸に赴きつ那一裹を漆折敷へ乗せ
て載て遽しく黄金の身邊へもて出て箇様々々と披露をしつ却朱之介を召入れバ朱之
介ハ恭しく衣領をかき合せて咳して徐に席に找み入て跪き黄金に對面す當下黄金ハ
席を避て上坐に請薦るを朱之介ハ辭推辭て寒暖を述恙なきを祝し別後の口誼細やか
なるに黄金ハ差羞てこたへをさへもえいはで難しく漁路ハ尚ぞと精悍しく朱之介に茶を着め





甘泉堂蔵

果子を薦めて款待けり且くして朱之介ハ茶を喫ながらつら〳〵と黄金を見れバ魂浮れて見るに倍たる美人にぞありける実にありとある花の中には盛の楊貴妃桜外に倚ハ仲秋の鮮明なる月にも譬ふべく肌膚清らに衣通りて富士山峯の雪に似たるべし清亮る声音を聞ば迦陵頻伽も愧やと覚え徐々たる進止を観べバ金蓮足下に開く歟と疑る那神泉苑に雨を禱りて歌を詠せし小野小町も滋賀寺に車を駐めて迷ひを覚せし京極御息所も尚存命で相遇ハ必顰に倣ひてん正是月宮殿の女仙謫せられて遂に下界の凡胎に降誕せしにあらざれバ佐保龍田なる山野の神の楓妖花精を走らして後宮三千の顔色のあらゆる中に風流少女も是歟とおもふ目を驚せし朱之介ハ今更に娼婦とよぶべくもあらざめるが如此は這良人ある桟木と共にふんを醜郎を取るよりも悪き白物なるに縦過世の果報なりとも名花を手折て馬槽に活て眺は烏許の嫐産霊の神の衍慾歟和漢今昔不平の事美人醜郎を抱きて睡り駿馬痴漢を騎て走る若これをしも忍ぶべくハ亦孰をか忍びざらん憐むべしとく返しく胸裏に快





おもひでる登時黄金ハ朱之介に三種の東西を贈らるゝ歟びを述る詞次に演説ける赤種々なる愛でに東西を賜りしを他も歎びに得る父母ハ昔に慧恭ハ生ては今ハ陸奥に在になると知ならずくしのひ得り奴ハ三人ハ景市刀祢に大抵ゆるせあひけり筑紫田舎の里へしも果敢夢か心地してハと恥しくいと哀しその折々の憂きも忘れて夫なれ幾千里距てひとり残し置し母親もる心にかゝりて今も今とそ一日も側安くはべ得るかと又朱之介ハ慰めてそもその詞おそろし壮なる者ハ必衰ふ盆貧富得失ハ各々時あり唯俺も亦這ハ九年彼此と流浪して今とてもなほ旅宿落着は母と共に俗に逃げし周防へ赴きしは叔父出ぬるあひて安堵まつ生別せ艱難憂苦ハ一朝に説尽しがたし其の後東国に由縁を求めて一大諸侯に仕へしが些の故ありて遠ざけられ大和の旅宿在る事両三年に及びたり並べて烏許なれども俺が薄命で見れバあやうき過世なれバ故郷へ初に帰さもあれ任もなき高家の所望にまして許されし娘婦なり王への歎びこれに優るものあらじとうちへ黄金ハききつゝ傍でも顔に緋桜の色ざしつゝ袖の

刺着草引抜て。そを宣へまうすとあらず家は富ても物足りても心に任せぬことこそ多かる返らぬ昔旦
恋しきのことゝふ間に。幾箇の女婢が手ぐりに縁の程出て準備の湯さ美酒殽を並べて安排へ
たる漁路が盞酒盃を薦る官主の席を改め常侍て寧やかなれば朱之介の景市なるに
まへしとは思ひながら献つ酬れつ半酔に飲も本色を露路して浮世難談迷語香の婦女子比
機を攬る辯佞利口に艶語をまじへて興されば黄金は憎からぬ漁路まで齊一笑て愛腹く。
楽すなる夕にとひけの左右する程に這日も既に暮れかゝれば菊燈臺の蝋燭まで光を増する
珎客に款待の半酣にて又夕饌の准備あり漁路は時分をおもひて辞して庖厨へ退り
しかば傍に人の侍らぬ朱之介は折を得て竊に黄金を挑みて黄金は聴かぬ振して
おもて浅ますや何事ぞあれ身は奴が兄なり吾は妹なりと謂戯も人や要あらずと君も朱之
介。此も怯まず尊生憎に訝しき兄なれ素より兼て知る偽の妹にあらずや世の人を何
とろまでの是表に別れ及び折あらばの母にあへれよしあたまを忘れ給ひな。彼良人が妻を妹と呼べ
るは即女弟に擬へる親み由る故なれば夫婦と成て妹兄と呼ぶとも妹と兄の義あるべし同胞も
なれ黄金が為に後々までの後宥に頼むとあらばの今日再会に結びて妹兄の夫縁是その
語の識るべき若し嫌ひなば百稔の命もいと惜しむべき身の心がの意に応へも学ぶを辞
巧なる理なき戈理の柵撥遁難き迷ひ女子の水性黄金はよく心動きて大かたならむ
取らむ。漁路が饒の足る響近く彼と朱之介は驚き故の席に快
退きて大く酔て臥る像く陽睡して呼べども起ず。登時黄金は漁路に示す。義兄は大く
酔給ひし姑く睡らしまゐらせん。夕饌は且退けて這盃盤も取納めよ。客房は昨夜のごとく
義兄の臥所をまうけよと小廝們に吩咐て今宵は休めよと漁路はおろかにて退りし
膝に討ひつ朱之介が身辺へ四折屏風を建輪して辞して寝室に退りける程に小
夜深て暁近くなるまでも朱之介は起出て客房へ赴きて深く黄金と倶に宿て通宵
相譚暁しらむ天の明の比起別れてその身の臥房に入りければ噫女婢は人の大悪の童

子とは云ども其非を知らぬものならぬに性悪なれば情を剋く慾を恣にする事なかりしに朱之介が
浮薄なるは又論ずるに足らねども黄金も亦是不貞の婦にて焦れ焦て未の穢を厭ず乳母の子なる朱之介と
と生性の相生あり是のみならず朱之介は幼稚き比より一所に育ちて親く深く年
歴て再會せし時に及びて艶冶妖麗相歡びて法禮借さず禽獣に等しき罪人と為るよを
知ざるも是併前世の業因脱れざりしなるべし後はあやしき情慾を放ちて合されけり閑話休題是より後
朱之介は夜毎に黄金と密會して迷ふべき情慾を放にせしかば大和なるまでを忘れて虚
虚とも思はで然れば主人の妻雄波は日も聾耳も疎くて何事も知らず朱之介は
黄金が為に只品を定めの豫なきものあれば遂に疑ふ事もあらず又城殿は日毎に出て屋
敷巡りて暇あればいたづらに出もやらで這他奴婢們の防御もまちまちに演路が進退脱落する
くその身は常に黄金が臥房の次房に宿りければその姦淫を相資けて些も外へ露さず原
這演路も景市と密通をする情由ある故に主の與に為ると念ど如之は相討けるか





る程に有一夕黄金は朱之介にいひけるやう我身は豫て微めし那唐布の身に入らずは東へ
還らせ給はん然れど相遇て後の別を争何せん然とて伴れて奔てもやがて故郷に
在せる母刀自の然ぞな歎せ給はん不義と不孝を身に駄せて浮世にあらん甲斐もなし
ざりしは詰むよしのあればや恁れば這番の且相別れて遇ふ日を俟んのみ就て預けまゐらせ
るとのあるべくも悔とも及ぶべき夜な夜な身が共侶に東へ奔れと言ひしを左右なく兼て引
ん。といふに東西を倦る是を認りてぞ出せる賤しきものから肌膚守る裏を合せてうち被らせ
その玉を五顆の玉を自其紙袋に乗せて嘴末は裏に這玉の失せ折から我身の母に拾
はれて不思議に返しめたりし奴が秘藏の東西なるぞ是を忘れ侍るなとて授与し比らせし一日
隻時も身に放さず今這玉を三顆分て身に預けまゐらせん。我言の差はず後
までも奴を思ひて夜も日も身に着て喪ひ給ふなよと云々今宵這里に来れば倶に奔りて
妹と兄の縁を其処に結ぶべし。その誠心を見すまでは親とも身とも思はず伴れて夫婦となるの

意をとあれバ宜とて返しつ耳近く寄せて兵衛に任せしが朱之介ハ感じて眼能ぞ肚裏におもふ
やう俺ハ今夜の私語ハ黄金に倶して走らんとおもひしハ素より立て此ものを非如納得せさするとも。
只今ハ言その若ハ不便なり。今ハまた後日の約束に従ふ愛する玉をも分ちて預けんといへるハ何のそのその
実情と知るに足れり。俺且武藏立ちつゝ那里の首尾を繕ひて事ハ假託け再来でその
折攫ふて移るも是は優さる分別なるべし。と尋思をしつゝ頷きてこれその趣理ハ宜ハ玉のあるれ
しもその傳来まで俺よく知れり。おんみの愛するものなりとなるに伝へ給ひぬ後會の識に
とて預けらるゝいふよりも真実おんみを思ふて肌膚に着て念じて後の便着を侯ん因ていふ
這番ハ獨東へ立ちて又出る日は来るとも一両年ハ過ぐべからず。いでくとかの五色の玉残彼
此と襷をて三顆をとりに會て白と黒ハ陰の色黄なるハ土なり又陰て俺ハ三顆を預るべし。
迹に遂るハ赤と青と則陽の色なれバ咱們ともにかねと諭して躱て件の玉をその身に持
る膚付の護身嚢に斂めつゝ這夜ハ雨の蕭やかに洗に最叡睦語ハ七鼓ハ過ぐ明



るに易き別を惜む情慾の安濟の浦に曳く鯛ならで、忍び累ねしうへ、この夜城藏音見に覿
月。ねうだ。娟を限のせめて一夜、あるひハ有一日漁路を竊に召し目見めど声潜りなかれ漁路俺
今汝に向ふとあり、媳んれ乃者朱之介を夜毎に臥房に披入れて忌憚り無く安楽まりて、姦
せしなる、俺ハ主人の次男にて親と兄との留守を預る身に太役を兼ぬる閨門潰れし不
義淫奔の縡の始末を知りて汝倶に睨しからうは兄の為に妻敵を討て怨を雪んぞ。
悪まざる生口よりと勢ひ猛く責問れる漁路ハ顔色土の如く駭怕れて一句も出す色さ
せぬと左右に身を戦して且くハ頭を擡しに城藏呵々と冷笑ひて俺が憤ハ怯なれども
又汝が挿げし主と極ふてその身の悪事を段あれども初より媳れに執心なるあら
ば左にても右にても兄の東西を他人に賞翫せらるゝこそ今宵ハ俺身
朱之介ハ先にもて媳れの臥房に潜びて本意を遂ん、その折媳れが不業知の不の字
だもちらせず汝も倶に覚期して命ハなきものと思へ。又媳れが承引て咱們に慰め玉

やるが朱之介ハも半分譲りて一宿代りに嫂にあはせん俺がそれハ神かけて実もなき鬼詰なし汝らの謀を嫂にハ談じて首尾整ひて命を助かれかし本にして後悔もなき飽まで権を懲さるに漁路ハ慌迷ひて一言も来りて退さらに黄金を側に入れ折に城蔵より入れる鐸の趣旨様々と報るに黄金もうち驚きて困じて今の謀の為る所を知らねども只暮々に朱之介を招きて商量までもわらで主従共に気を悩てな左右に思惟るに才に智略なかりける黄金ハ漁路に耳うち那城錦の難題を聴ども俺の知るまでに側杖打るべし。その険危を脱れん為俺と俺身と臥房を易て今宵窃に睡るべし願ふハ俺俺が身代りに謀りて那人と一夕宿よ然とも昔の忠臣義士にも劣らぬ者と思へる義を頼むと他事もなく拝ぬるにぞ漁路ハ眉を顰りて鐸の難義を知りぬれども稚鐸ながら忠も義も皆あるものに似られ既にそれと見るハ既にありときも黄金ハ吃まも依が流れて美しく昼市と情由あれどなんぞ其頭の手も月来日属知るに為るにあらねども知りてあらぬ面色せし依を愛する心の誠然とあるので主の難義を救ひ給へと言ひぬ今面前にて刀に伏して死なんとする鬼をしも然とハ知らで早晩依の奥に外視御示さでひとめの臭きに益せし悔しれよと涙吐つ怨ぬれバ漁路ハ困じて為すべきなしとひとりく嗟嘆して年来不思なれバ左も右もあんべうてんバて為怨をなむるぞと勧解れバ黄金ハ欲びて俺らんあるある為るなり早晩鄒八の為ず日に周防の校尉に封じて這里に在らねバ那人と宿るとも後安からんそれ他し枕を易ぬとも覚らでぞ任せんまで任せらるれ其事にあらで他れの迹の滅るべきものならねバ術よく謀りて城錦に努力暁得られる頼むぞ然バ任せん右までと謀し合せて主従の密談数刻に及びけり憶な蛇ハ天性淫奔なり大内義興の焼亡せし蛇に大小ありて煙の内に顕れたり然れバ城蔵漁路们も亦那小蛇の後身歟薄情なりける邪淫なり。

第二十回　閨門を関して荷三太容を遂ふ
　　　　　妓院に宿して朱之介禍に値ふ

然程に日ハ昔暮れつ、這夜も既に時移りて音四ッの鐘の響きくに漢路ハ黄金と約束を錯へず、夫々臥房を首めて宿るに程に毎ならず主人の妻の雄波が猛可に所要ありとて人の呼せけれバ、折よしと思へど、おのれ一人で能くかなふ事とて、納戸へ赴くに、雄波ハ招近づけ、嗔漢路今夜遅く退て若や就枕でもあるべきが、雪等時肩癖を発して、給黄金も小女子達に交代ニ撫手せさせども、腕力弱ければ、此も利き目果ハ熟も睡臥て物の役にも立ざりし。御新嬢に使わる所なれば夜深ながら俺身の按摩を執らせよかし最も総の所好がらじ且く頼むと他事もなく、あれて漢路ハ推辞ニもならず、そをも御用に候ら賤妾とても指頭に力もあらねバ、あなうる称べく侍らねども、抓を療治に疲労せまでも且阿肩より初め侍らん。先さま臥玉へとて、寄り撫手つ肩癖の手拍子も人の知らぬ今宵のうれ腹向ふ心もあらぬに揉りても大ならぬ術にて肩の機転利きぬに拍子母の腹は有繋に易くに脊筋徐に指降ます灸灼の潰ぬ頭

七の命九の命苦の世界、十指の運動ある暇なき十二三より使れし根梃の主と宅母君の所要に小夜の深ぬれバ那約束ハ眼に做る究所も知らぬ章門の出し後れなるらんと氣さへ心を揉勝る手前勝なる人欲の私雨ふあらねども外へハ洩ぬ鈴の聞の主も胸も狂ふとハ知らぬ雄波ハ笑げに嗔漢路太義なりとも疾く肩の軽ふ覚えて重擔を卸せし心地ぞする今宵ハ睡り目あるに候へ然ぬ所も及ぬ向ふに似ぬども面亭に在し逗留客の朱之介刀祢ならんハ黄金が為ニ兄の好ミあるふよしや豫も俟ぐるに黄金が對面まつべし今と向れ折ぬ氣も属る去年来疎遠なるとても義理ある兄公の来ますなる式對面せぬも勿論宜く管待しあらせとこそ見せしかバ兄せしかども逗留もあまりに長ければ桃太郎も家老爺も周防せあひける旅宿れ留守のなれバ其首に女オハあまたあれど親を過して殘番も對面ハ入らぬ甚麼黄金ハ爾後も兄公に對面まつる歟と問れて漢路ハ赧らむる顔ハ瞽者ふ見えねど片輪

愈兆と世に多く言ふ所、究竟の所と云ふ究竟所。天録所に下なる並より俗に稱する力書に見えたる所見ゆ

車も心あれば裏く胸の苦しさに推るも緩む逆戻り。一言も訥く姑くぞ答難き然氣
なく古那大和の阿客人は商賣用の事なれバそ彼へも此へも赴るは宿に來るは稀なるを
そ一ハ現在に乞待らん新奥さまへは幾ら日に對面をされてその後はとふても雄波は耳疎なれ
屋敷へ一度も上らず鎖れ欲しきのみにせばせられねども哀ともなしかれバ上るの人達の思ひ遣る事ともぞ何をも
ん雅とそ却你あの同じ一之序次もあらべ御新娘に俺身が怨々ちつるかと報うともけーさあら
む夜は深なるん休みねかし臥算は甲夜に布してあり俺身はその原に就枕てそれ火の用心を
頼むぞ太義々々と労ふく雞ては遅る身の暇漢路は只管吻とつく自然の白雲の外に冴ぬ
鐘の音も指を脱して立る腹を横に臥さして積らけて告別て運く走る外の隣なれ竊
歩しつくるが径に黄金が便室にぞ赴ける。却説黄金はその甲夜の間よりぞ衛よく城藏と
欺んとの事なれ二更の主の御音く比連の漢路を呼びしと他の者に一個の妾婢が
漢路は目今納戸へ召れて老奥さまの肩癖を撫拿まゐらせて侍ると語に默止く稍久し。





等と申すども出で來ず今も那人が潛びて來るが争向ハせん非如俺身ひとりで漢路が
臥房へ避る者に代りて這里に宿るのは何をもて那人の手を牽ふと遅して去んぞ這里
と那里と近ければ躰をとても忍されん左や右やと思ひ難く安からぬ胸ぞ騒ぐを
鎮んと衣引被ぎて臥てをる浩処に城藏ハ御宿に漢路を酷く權して今宵こそ遂ん
他が必黄金に報で辮のあるを知らずして推来之什に先ちて日屬の相図を
坐と尋思ぞしつつ人定の頃その夜亥中の比に潜らに黄金が臥房に來よりけれバ黄金は咄嗟
と駭きすらぬ声とも発さバ怒に乗して殺しやせんとてちに物の音に有数ゆる者も程えーけれハ身を
縮して息もせず城藏ハ這光景を首尾ぞとけれ宜合笑て衾の内に入りける。噫嘻
房の溢中黄再の言語に生ぬる淡き似ろ拂べく説べきぞの説べくて説く
則小家の論説あり勸懲を示す在る女の姦夫淫婦の恥を知らざる人形にして獣慾なる
の那一隻の牝狗を趕く群狗喘ぎて乱走るなるとも是安を異なる可现容は共に美人にて。

便是外面如菩薩心如夜叉とのすゝめと其趣大同小異悪い所云醜悪

心の悪女なるにあらず姿の美なる人ありとも心の醜き人ありとも其なす所の美悪なり。なを美悪なる所に美悪ヨする類ひで美悪を心に擇まず時は黄金の色に迷ん便是足張文成が遊仙窟紫式部の源語の餘迹を紙上にうつし筆を曲るはあらぬ看官あるべきよりあらべく作者の辧を侯ずして明の酔を醒さぬあらん欲間話休題再説その夜小渓路ぬすみ足に手燭を剔出納戸より退出来て黄金の臥房に入らんとせしに主人は何の間にか黄金は既に城蔵と枕を並べて臥て浅ましく今はいふもあらざりし其首を退出て渓の間なる身の臥簞笥に潜み入りて今宵に限りて生憎に納戸へ忍れて更闌るまで引着られてあらしが那約束の時刻も移れて心急ぎにも新奥さあの御難に遇せあひけん俺身の役を免れしは欲ぬ似それぞあるも非文字く粧を装せしを怨をゆる鈍すとまそけのと臍を噬まで悔しきに祢る神はなけれども祭渡りし筑麻の鍋神輿を安措て睡一睡翌快起て賠話せんと又帯を解捨て臥て枕に就に





けり倦りし程に朱之介は夜毎に渙路が嗜睇し黄金が臥房へゆかずあるに信音をも小夜の深るまで絶て音せずなりしかバ心ならず侯不楽て睡らんとするに宿も寝られざりつゞと思惟るに黄金が臥房の頭まで渙路を宿すもありなく導しそれは夜来を思ひ得ぬ他はあら麼く憐すて睡らるゝに疑ひなし居宅の内にて這里と那里は遠くもあらぬ廊下傳ひの案内は他に縁しきも俺よく知れり真夜半にそを過せんに今宵を空に過さんやとひとり焦燥つ情慾の林ぶむべくもあらねば襟擦遣ろ起出て廊下を過る側の杉戸をそと推ひらき随に闇けれど其処より進を潜び入りて黄金が臥したる枕方なる屏風を聊推開くに進み入らんとする程に見れば既に一個の男子ありて黄金と倶に臥してあり驚きながら遠火光の刺を便りに熟視れば這密夫は別人ならで主人の三男城蔵は浅ましくも臆立くも心悪くも餞けられて娼妓と堪ざりければ抓着すべくせしが俺とても俺が東西ならぬ他の妻の事ゆゑに尋ねめで提ん理のあらぬば黄金を情由を問もせで性起らバ不覚を

と取りてむかんと深念せんて阿容々々と外面へ退りて惆然として又早くも那城藏が俺より先に
嫂と情由のありける故大胆な然もあらで俺と黄金と情由あるよし那奴は誰なるや知るぞ。
這雪霜に抜駈して不意に起りて短兵急に攻着て竟に来取りけん定に夜襲は城
藏が陣法智略の素速きよ若果して介らん然れば黄金は実情なく俺が意に任せ
ぬ事の敗になるらんと俺が為にする後とげの漁路に向ひて是等の意味の具に知るよし
あるべしと思ひ入りて夜々に又次の間に赴きて見れば漁路は熟睡して揺覚せども毎よりも遅
く臥たる睡端の春の短夜貪り宿く青年女子の癖なれば然までに夢なる時ばかりまで
覚ざりける寝貌を熟ら目成りて見と黄金は比ごろ二の町過て三の町四町初旬の初
堅東と五島鮪よ似たれども黄金は既に先客ある這雪の年を名代雛妓ぞ空くして
容房へ罷りて獨宿せんより優人原景市の情人なれば亦是縁あるべき衆生に在なれば我
済度して持なせん。腹に計較む浮気の悪性行燈を風と吹滅して其の懐へ入りしが漁



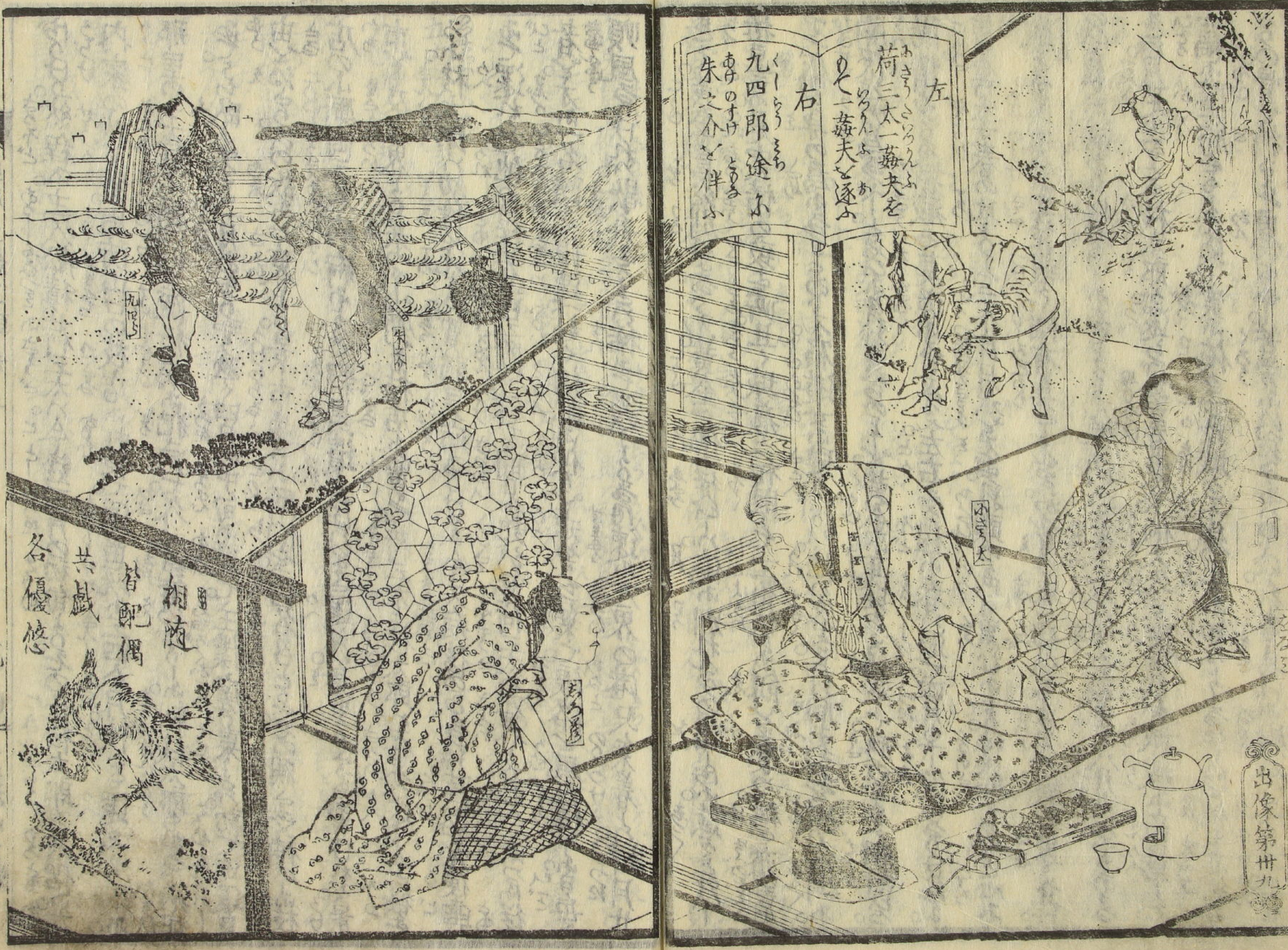
路は忽地驚覚て城藏とおもひしが鬼に取れし心地して今更に声を立んも然すがにて
ありけるが是は這雪の約束ありし竹町にて城藏主は既に新奥にあるかん臥房に潜びて来ま
して共侶に宿らんと思ひしが鈍や夢さへわかぬ故のあやめ夢ならば這里は俺が身の
臥房なるに入替りてぞ睡りけん然るにこのほどより城藏主の新奥さまなると思ひ違へしこそ幸に
来ませしを知らずに偏に漁路なりと思ひしに空寝にもあれ脱れぬ悪縁せん術なしと
覚期して只管聞え給ひしは朱之介と知るよしも無く空に枕を並べてたる天の明ぬ比より寝ぐらに城
藏さへそれと悟りしかども世に亦傳ふ艶治郎なる朱之介と結びし假寝の悪夢は是
覚るに惜しと思ふのみ知れど知らぬ面色して後にかはらでありしものから黄金に報ひ是
より城藏は朱之介と一宿を黄金が臥房に暢む既に彼は辯舌を暢ひ
いくのむつ言れば黄金は朱之介の手に会んと欲ると見れども言は阿房が佛生寺で夜
行太黒藏二名の賊の媒配の妻にせられて左右に媚る為体に相似て甚しき濫

刀邪淫に恥を知らず。白物们の癖あれバ、城蔵と朱之介の父子ハ和睦して交る柳巷ふ相伴ふ嫖客に異ならず。迷に秘きたる閨房の秘ごとハ偏て公然として相譚く。日毎ふ昼も酒うち飲て夜の淫楽を竟とせしが、朱之介ハ虚々実々大和へ還て其を城蔵の親の外代(?)にさら活業をもち忘れて、莫逆知己と唱るのミ、家を支理らん良たる世の胡慮よりなる事情と顧るに、城蔵ハ朱之介を忌嫌ひて親しきもあるハ他が黄金と情由あるによりて、ある破隙に蹤入で謀りて本意を遂るに、俺のミ独窩(?)せんと強顔下らず、黄金も然こそ俺が自由なる者なるべし。一宿伯代りに他は譲りて後ふ継を分つとあれバ黄金も俺と女才なせば、非如世ふも強郷(?)食とも生涯よく畔を譲りて竟に一畝も失ふとあれバ謗ふ似て俺に利あり。倘親兄に違事あれて発憤あくあるとそもその折ハ朱之介ふ口説周せ些(?)添若有ふ活路ありと詰寺思して、後々までも忌ぎ嫌ひ、又朱之介ハ目足より先に城蔵が主の趣を黄金に吹て腹の立ども、今から他と長短前後を争ふとあれバ俺が事敗





まじく黄金と長く別れなるべし。黄金が他に従ひし、俺に別れん身の惜しさに代るとて抵言(?)是実情の致す所、且く城蔵と和睦して一宿代りに餌を養ひ、他も亦満足して俺が身の為になるとおもへバ、宿遊女に疑言ていふ。他ハ客もれ向ままを娼ん倒に胸狭き所為なるべしと思ひかへせば、おのれらのよしや黄金に耳をもたせて形のごとく相討なし。陽情ならぬ城蔵と莫逆になるて左右する程に春ハ過て四月も下浣になりけり。黄金ハ季子春の比よりして三个月月水を見ず。乳頭の色も黒むによりて懐胎ならんと心に識しかバ朱之介に耳語く。倘有身ならんあれど、身の乱でなれども良人の旅の留守るをひとつの所あり。什麼の子にやあらんと問ふに、朱之介は些も世に八月出生もあるを思ひ、月足らずとも桃太郎が還らバ塗音(?)ありへし。倘又久しう還らバ城蔵に留置(?)窮ふ堕胎をもよめべし。実ふ俺が子歟城が子歟正ふ知るよしなきものから他も亦然ふからの骨を折るも思ひでもなし。苦労ふれバなるほどあはれにも見るげふ慰めて旺(?)を損なせ


左
荷三太一菴夫を
もて二菴夫を逐ふ
右
九四郎途ふ
朱之介を伴ふ
相随
皆配偶
共戯
各優悠
出像第卅九

けり。然程に主人荷三太ハ今茲正月の初旬より其の子桟太郎と共倶に六内家の城下なる周防山口の枝店に赴きて逗留既に三四个月快くも還るべかりしに那里の主管小廝们が流行病に犯されて久しく起も得ざりしに剰桟太郎も亦其病症にぞうち臥しけると一月あまりも煩ひて四月の中旬に既に主僕癢果しかバ初て進退自由となりける故に左界より京市並に小廝们を二四名おくりてその闕を補ひに枝店の小廝両三名病痾によりて親里へ遣しおきしまゝ還らざれバ員欠るもあればなり京市ぞも又左界より来つる小廝を枝店に留めて荷三太と桟太郎ハ左界へ還らんと欲せるに桟太郎ハ幼稚より背弱多病なりける今又病後のことなれバ陸路を篭輿にてゆき還れと他の従者両三名と隷て前日に起行せ荷三太ハ左界よりおくり来つる従者をおもに一名随へて浪速へ赴く海船の便りを求めうち乗て浪路と風に任せて昼夜順風なりければ歌舟まで補をかけしより早くも速に左界の港口へ乗着し肆月廿





六日の真夜半比の事なりけり。又桟太郎ハ初旅の事なれば親と与もにて獨自由ならざりしが這里に立寄那里に顧て専遊山翫水の為に日数の後るゝを迎ふ人をも恐れざりしやくれしてかへり着けり。是より先に荷三太ハ港口へ船の着し時真夜半なれども居宅まで五六町に過ざれバ又那従者一名をつれて宿所へかへり来ぬるに小夜深ければ熟睡を貪けん奴婢们を驚せじと潜かに背門より入りて雄波に対面しつゝ黄金の一包を秘蔵にもかへりしよしのみを知らせぞ其侭納戸に就寝しける。詰朝快起て早飯を果せし比且をとる黄金に対面して桟太郎も恙なくかへり来ぬるよしを報んとて黄金が便室に赴きに昨夕朱之介が其夜半に暁けし私語に此も睡らで明さんと思ひしかども夏の宵の入に貪睡たる比なれバ両人共倶に熟宿して既に天ハ明日の出て窓の戸節に刺る影を枕に受さへもまだ覚ざりしと知らねども荷三太ハ這光景を快からず青年女子の癖なれバ咱们親子が長旅の留守に朝宿ハよろしからぬ快覚させんとおもひて黄金々々と呼びかけつゝ建てる屏風に

手を織て二折許引開てぞ見れば思ひ掛ずも黄金ハ一個の後生と枕を並べて臥るが其の
時俱に驚覚て起んとして男女齊一に愁やま大と面を照して怕慌て避んとする朱之
介ハ度を喪ひて吐嗟とばかり平張俯ぞ黄金の透ざ襟ひ被て頭顱隠せど尻
癖の有る科を術もなく縮びけらし寝間衣も縫ひ為たる大難義折もあれ這の鮮明血
らぞ其處へ來る緣と良人の身の罪置ところ無けれど暫時縫けれども荷三太ハ素より思慮ある伶老
煉の者は堪忍を上旨として騒ぎもせず罵も咎めもせざるまゝ屏風を引輪らして足ハ又も不退
然ら躰て納戸に出て妻の雄波にうち對ひて逗留客の有やと問に當下雄波ハ朱
之介が古又の趣怨くと云る随に報知し耶大和なる商旅ハ黄金が為に己卯の舊
好のあるよしなれど對面ハ只一度のミ日毎に彼此あるきて宿に在ことハ稀なりとへ
荷三太冷笑て目さへ耳さへ疎き渾家の何事もよく知るべき身の正直に足ひ比べて人
毎に皆正直ぞ思ふて不覚あるべからんぞ城藏に問ふべけれと嗟きつゝ嘗を鳴らし城



藏乃呂ぞとて呼せけり然程に城藏ハ昨夜半に親荷三太の帰郷を夢にも知ざりしに
今朝ハ未明に呼覚されしも驚き起出てぞ俛然と對面して留守中の所要を述稍りて
論しるとてその身の寺舎へ退りし耳くし又召れて來そ納戸へ赴きしを荷三太身邊へ
招よせてやよ城藏恐くに黄金が見口叩るる朱之介とやら後生が大和より來て久く逗
留せらるゝ甚何等の故ぞ三四ヶ月留りて大和へ返さずぞと問れて城藏那人ハ一百疋の
唐布をも買べく沙金もよく見せんとて尋ねて這里へ來つる也我も知らぬぞて唐
布ハ船問屋その數足しとて又の入津の日を俟んとて逗留させ今も良く勿論嫂にも見
品を繪角の比母親其の福富の宿所なる後他郷へ赴きて疎遠に過せしよし
るれど又苟且の客人なれば其のまゝその意に任しけるに聞て荷三
太ハ笑みて頭をうち掉て生活の為とも家の妻子もあるを長逗留ハ要なき所行
なり況今ハ唐布の新渡なければ荷ハ整ふまじ縦何時まで俟とても望の稱ふべくも

あらねば這義を報てけふ速ふ出し遣るぞよかし。かれ然とも那人疑ふて還らじといひてせん術あらで。畢竟和郎も由断ならず鬧なるゆゑぞ。ところあるけふ吩咐れハ。城蔵ハ猿の身ふ足の臑毛抜る心地して。痛入する親の裁断。偖俺が事へきへ知られハせざるに。と思へバ色も顔も。只阿唯々々と言葉少し。その身の子合ふ退出ると。朱之介を密ふ招して。只今親ふ如れ趣箇様々々と甚而告く。ああ必謂ぬが。親爺ハ昨夕真夜半比ふ船ふ着して。とく還られたる。余ふ嬶汝れハ今までも。昨夕の侭ふ起ても出ず。姉婢们ふ詰ね。持病の積のや發りけん。となりのみて誰も訪ねるもの似合もあらず。と問れて朱之介ハ悪びれたる。然れバとその事とれ今朝も咱们も黄金を倒の時刻を宿送れて目の出するまで在りける程ふ。錢も親ふ余見られたるその為体ハ悉く見るも今見もしく耳ふ示して。かの折咱们ハ親ふと知られぬ黄金を目注て諭せしが。撲仆して逃んハされど。それもあしき狼狽て。活る心地もせざりし。ふ罵も知らぬぞ俟ふ。親ふの退出の後ハ。透を得ると脱出て。客房ふ女の来ふけれど左ても右ても這里ふ坐しまる逃去らず。やと思ふのみ。那唐布の一義もあれバ。和君ふ商量して後ふと思ひつつ。そありけるふ遂出されのまふして。支治ハ且めでたし。されどもあれども。唐布と沙金の二種ハ何ふ入たる。大和へとくハ還りせざるハ。いかふせまし。と陶惑の密議ふ城蔵又駭きて。それもさて事ハ稍解せし。然のみならず。且屈しのみを沙金のみハ今しも日ありて。唐布ハ新渡なり。と親爺のおもハくありがたし。哥々ハ出し遣るべき為の摛鬼ふのや。あるらん程なく船の入べきふ左も右もしてまみせん。哥々ハ這里より程遠から攝津州住吉の社頭なる。岸松屋といふ客店ふ宿日易城し後ぞ。那岸松屋の主人も咱们相識なれバ。その名ハ這里へも聞えたる。今その旅亭を定なば。後日ふ音耗せん為ハ這義を忘れ給ふな。と世ふ憑しく慰れバ朱之介ふち領きて。いかなる趣あるを知らず。黄金ハいかふ事べき。と問へバ城蔵沈吟して。哥々のうへぞふ曇算なれバ親の去ろを推量るふ。兄様太郎の帰御を俟て離縁を薦めて。親里へ還さんとてもいばれけ。あなたの安危の定る日ふ。俺ふ亦く報まゐらさん。といふふ朱之介ハ欽びて。介らんゆゑハなかるべし。

且宿易と急ぐべし。と耳ふも果て遽しく客房へ退きて旅行の打扮故のごとく特にそなへて
整て却城藏ハ別を告て浪速津投く立出たり。是よりの後城藏ハ竊に泊れるを
占て黄金あるを思ひ絶せん猥褻がましき挙動せしを俺幸ひに美目にあらで朱之介ハ一
人を損代に出せしん。然のうへも竟造化をと思ひふけれバ後々まで閨門おのづから理ふて制せられ
どの擂に聞く外の侮りなるけり。遮莫黄金ハ初よりの実情をもて城藏に両路かけし契
りにあくねがそこらのあるハ倒に物怪の幸に似たれども心にかゝる朱之介が出て往方と身の久後も
測りがたきハ男の習お定る心もせよかしと面目もなき術なさも思ひも釋れぬその朝より持
病の積に假托て臥房篭りに長き日も消し難く不樂しけに壁に向ひて汪々とかの人を癡
惓れて苦しくも吻と洩く息の雲と為り雨とふるかし夢の跡結びも果ぬ妹と兄の山外恋しと
歎しを案下某生再説朱之介晴賢ハ必せずも貴介る逗留して邪淫の為に家
路を忘れ虐々として在りける程に竟にその事發覚れて主人船積荷云云に遂出されて

又゛ぞ゛に進退其首に谷りしを。城藏が云云と慰めしその比當宇且摂津州を退んとて住
吉を投て共々ゆく程に肚裏に出たる。俺唐布を買ん為に左界に杖を留めしに折の好くて
手に入らず。されど春より二ケ月の借債あるを取られなバ金ハ故の侭なる二嚢あれバ
あり。大和へかへると克の城藏へ帰参あらざるとも是非に在れバ徃さ毎に四海皆兄弟之
又攜ぶ安達ので來て落着く処のあらもせんぞ事已上を活ぐ子の所為を俺が本意ならず
ぬるあれバ且城藏が意見に任して黄金が安危も知るべく唐布も買て家ぶ買べく
大和へ還るに不如と尋思して急ぐ程にまた住吉へ半里あるべく思ひし比物欲
しくなりしかバその路の傍なる村落酒肆に立よりて甩概酒を喫ながら酒肆の主人を見
かへりて谷羽は問ずくは。こゝらあたり往吉の社の頭に岸松屋といふ客店ありやと問ふに主人答
頭を傾けて那社頭に海船の宿する客店多くある。岸松屋も姫松屋も有ものなれど
あらもせん己の知らざるにて朱之介ハ疑心起りてなほ云云と詰る折後の發る見を

樹て憩ひたり一個の男子あり朱之介を呼うけて客人咱們は住吉の人氏大和何某の所要ありて岸松屋を問ゆきとありれて朱之介は駭きながら急にその人を見るに身長高く全體肥て面は薄赭色なるが年歳は四十有餘なるべし身には仁田山紬の大縞なる夾衣に皁紗綾の裏衣領とかかめて被たるを二領かさね襲着て腰には白金の重帯あてる苛物作の長腋刀と横佩たる若是角力士にあらざれば地方に名の賣れたる俠者なるべしと思ひしかば遽しく會釋として原来和君は住吉の里人でおはす歟咱們は大和の旅客なるが左界の所親許に赴きて目今はかへるさなるに人と約束せしことありてその人論く住吉なる岸松屋に逗留して五日耗と等とられしかその旅店に宿を投んとするものから不知案内なれば心もとなしあれば且這主人に問まさなとへばその人領きつゝ笑ふてよしある名も和主知らざる所あり那岸松屋は年々に活業衰へ遂に窮くなりて借財多くてけれバ債を償ふに克はざるの故に家を鎖して門に賣居の紙牌を貼せし剰の借屋へ轉



宅せしは四五日以前のことなりといふに朱之介は駭歎しぬ。そりゃ亦的が違ってた約束せし人は岸松なるに外の客店に泊を投て俟と使の三条ていで遂に届ざるもあるべしさもあらばとかくの困じ果たる面色なるを件の俠者見て必らんやせん術もあれ咱們は十屋九四郎と喚るゝ地方で二の俠者也。那岸松屋の僑居の東鄰は咱が宅にて西鄰は空地なりあなたぞ岸松屋を訪来るもの一人としてすぐ宿所に立よるで他が往方を問ひたる咱們が客店ならねどあげよう和主の泊をせん然らば約束せし人より異日に使を来ずとも家當ざるなしあゝかれ其の言に從ひなさとて他事なかりけり俠氣のうと憑しく覺えて朱之介は兼歎びてその好意にそれ晩生は大和なる上市の商旅也朱之介と喚るものゝ宜く計ひ給ひ予むと頼めば九四郎異議もなく然らば咱們と共侶に日の暮ぬ間に急ぎ行けば這頭に所要ありて来つ咱們もかへり酒をも喫うとての随に憩ひてけれど誘せよ快々と急ぐまで朱之介は遽しく酒肉の價を主人に取らして菅笠引提て九四郎が後に跟ひて出にけり。

徒而十三屋九四郎ハ朱之介を伴ふて毎く宿所にかへりまゐり女房乙藝に猶ほ斯々と朱之介が
事を告しかバ乙藝ハ驚て朱之介を稱室に休らハせ茶を煮て飯を薦めて最丁寧に曾待
けり是より日々に朱之介ハ主人の進止をまちて知らぬその活業ハ櫛挽にて店舗に職匠両三名
を使ふて皆乙藝に任用して九四郎ハ活業を上日とせし年来地方の後生們の頭人楽部に立ち
まじ閑諍の利擇ふ夫婦の離別或ハ人の子の勘當せらるゝを和解て舊ハ納るゝ事の任にあたり
しかバ宿所に在る日ハ稀なりき然程に朱之介ハ心ゆくまゝに九四郎が侠気をまで見せられてはと一句に
あまりしかど賊藏が浮蕩まつ亦音耗もあらねバ志の如くゞ僕不樂で猶予して安からぬ程に
有一日九四郎が云ふやう咱們ハ厳嶋の辨才天の百味供の講頭なれバ翌ハ舩路を安藝へ赴くなり
論和主の逗留ハ何時迄も由ければ妨なしといへども商旅の身なれバ本錢も盤纏も要かるべし懐にせし
金あらバ咱妻乙藝に預けねかし分ちて実をまをさバ咱們が這里にあらぬ非常の怕れなき
けれども旅宿の留守ハ他御の客を偏るものにもあらねバ故にその義に及ぶのミと云ふに朱之介うち

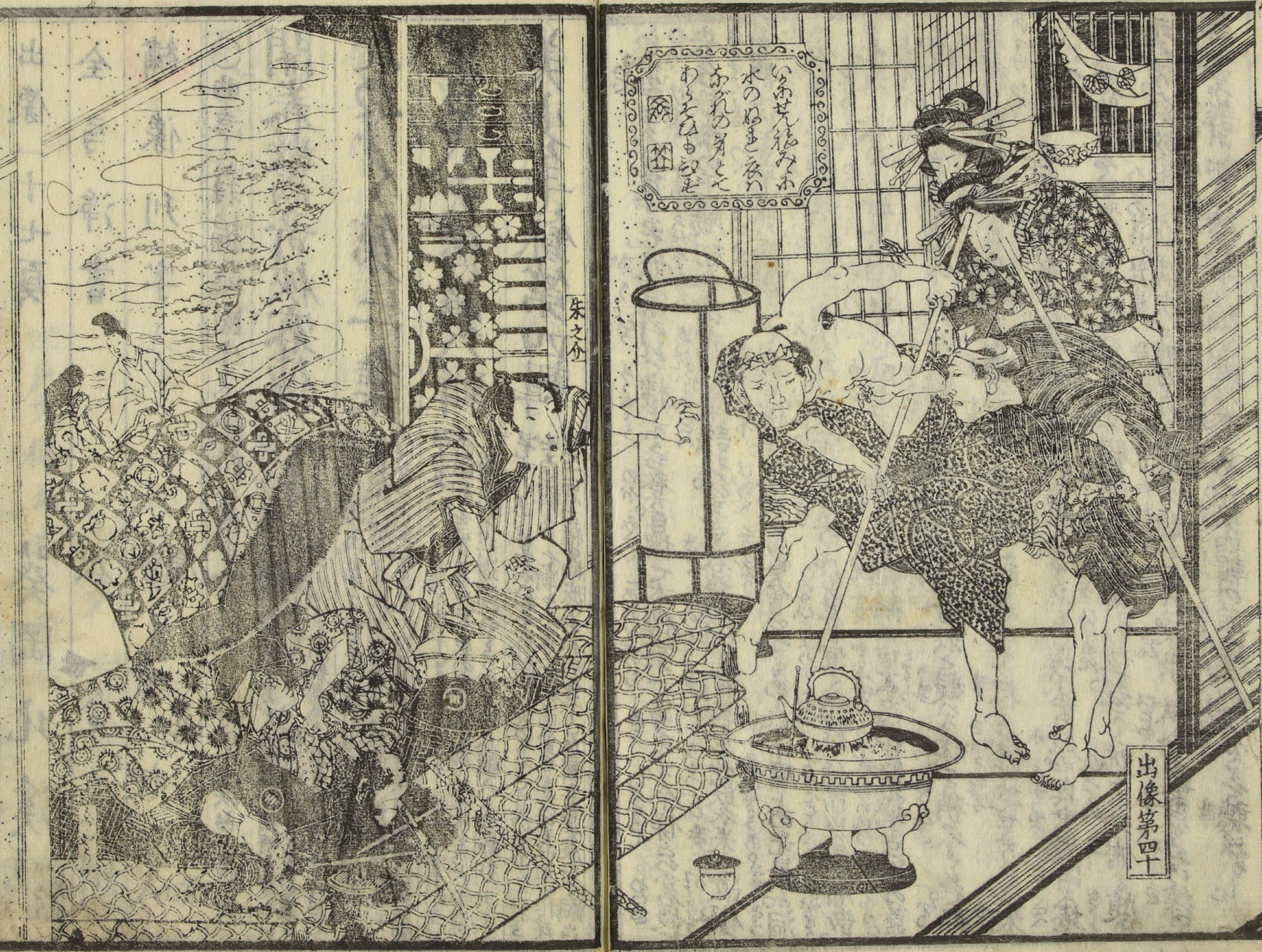


笑て肚裏に思ふやう現這主人の侠気なる悪心あらぬものにもあらぬ然るを推量もて疑ハしく所藏の金をミす
ミすミす偽りて預けざるも夫婦に賊心あらんにハ殺して奪ふも易かるべし然るを随身措くハ倒に後
安からずと尋思をしつ一議に及ばず志属れし親切の欽ひを述金を出して九四郎に預けしかバ九
四郎受とりて數檢るに百九十五両ありその初め活業が朱之介に遺与せし金ハ二百両なるを三両ハ
京師と左京にて路費と贈東西などに用ひしに今又盤纏の為にとて三両遺して預けし登時九四
郎ハ女房乙藝を身邊へ召て件々と言示し金預りの手実を寫して朱之介に遺与し
件の金を乙藝に當處ハ藏めさせて堅く鎖しその鍵をも乙藝に預けて留
守の間の用心を教諭しその詰朝錢十名の講暇計と共侶に海舩に乗りて安藝を
さして投てぞ走りける是よりの後九四郎が義弟乾児の後生們ハ日毎に立替て代る詰来て留守の
安否を諮ね或ハ東西を贈りもして朱之介にも親しく交り任ひし程に朱之介ハ昼ぞ日居の樹
胸を醫さんと思ふて有一日酒を沽ひ魚肉を徴め件の後生們を屈め團坐をさせて四表八面

うち相譚せそしまく笑ひ樂む程に後生們ハ帰らる客人ハ這頭に名高る乳守の里と號ぬハ堺や江口神崎に衰たる京師の外に乳守に優くす柳巷ハ又なし今より誘ふ俺們が案内仕らん家裏にあらぬぞと言語斉一その口ハ色好をる朱之介然らでも酔る癖ある連に雀躍して否くべく行ざらんや咸共侶に一身を起して藝人ハ屡禁れど朱之介ハ妙ぬ態して呼做澄ぬ者ぞ立出る中に二三名乙藝子叱られ呼禁られて遂に留ず出る帰りしかバ六市四搃と喚做る此彼両個の後生ハ冬ぞ朱之介に従ひて乳守の里に赴けり柳巷に至り郭道と且く浮れあるく程に朱之介ハ今宵初て路柳牆花の美麗しく鄭声艶曲の夜擔しきを目撃なれバきれバ魂うかる身ハ附ぐ誘る青樓に登らんと獨ずさ進むに六市四搃ハ酒に酔と共に興さへ稍醒て天明て倶まかへらんハ登楼せず料て也へば娘れの腹を立て哥ぞ還らバ迎さん紛て戻るに優とあるべし更に聞入ざれバ難て浮世ぞ楼屋と喚做する乳守第一番なる名楼へ案内して往く。件の二人ハ引外と逃て宿所へ還りけり且て朱之介ハ六市四搃が迯るをも知らず只今さ

今様が自殺の趣ハ第四輯の首巻に返て具に見ゆべし余紙なけれバ略したり

らね出で奇んハ宛も妓有に引れて楼上高く登り自擇て本樓第一と唱ふ今様と云名妓を央り献酬の壬觴初會の式礼事訖れバ又ご客先遊君們ハ錢を取来て歌舞艶曲の技を盡し或ハ馬激六して興を催し快樂の歡會凡べくもあらぬ其の席上の光景ハ洞房の趣ハ毎輯稍數に際限あれバ具に述ずハ浪あるに看官宜く猜ねべし然而更闌席散アそ朱之介ハ了影衣に倡導れて臥房に入るに緞縫錦綉の重衾衣沈麝鶏舌の香の薫亦人間の東西とハ思はずも身ハ遊仙の岩屋に神女と睡る欤と疑るゝ侯に稍久しく老那今様ハ臥房に来まけれ然ども痞の發りしとぞいふ解もせず只管に背を抱せて寐れバ朱之介ハ艶とて其の無礼を咎めんども然しも分甲斐なければ只ぢ倶に臥盡て酔に堪ねバ熟睡をするその間に今様ハ朱之介が腰楠の刀を窃に引抜て自ら吭を串ぬ俯て隨に死けり。お故に朱之介ハ濡衣を被せられて領主の聽に牽れて既に獄舎に繋るゝその縡の趣ぞ詳に知まく欲せバ是を編を継ぐ巻を易て第四輯の開場に解分るを聽ねかし。






近世説美少年録第三輯巻之五 終

○著作堂主集近世説美少年録第三輯画工筆耕剞劂人目次

出像一十七頁　葵岡北溪

全丁浄書　谷金川

繍像刋字　朝倉伊八　原喜知

○曲亭翁編述國字小説新舊畧目　書肆文溪堂藏梓

開巻驚奇侠客傳　第壹集五巻 當卯の冬美少年録三輯と同時に賣出し候 ○この書ハ南北朝あんわのゝち新田楠のなりゆきを譲り人々よ侠客の列傳を開巻驚奇の書目あり珍説

たれどく第二集　五巻續出 第一集より後引つゞき出板遅滞なし ○この編ハ館の小六助則の復讐書のおこりと楠姑耶姫の列傳ふくまるその間神出鬼没の異聞あり○毎集出像溪齋英泉画

里見八犬傳第八輯　故ありて刊行遅滞しかども又当年ふたゝび稿本出来則書画彫刻を急ぎ來辰の春侠客傳初集美少年録三輯と引つゞき遅滞なく出すべし○本輯八巻嗣刻出来

美少年録第四輯　[illegible]容貌の美をもて貞の美少年に[illegible]この輯より[illegible]漸々に容止心術両全なる貞の美少年を[illegible]一篇一稿の勧戒ふかく分明なるべし○毎輯五巻来辰の冬嗣出

松浦佐用媛石魂録　前集三巻 後集七巻

美濃舊衣八丈綺譚　全五巻

勧善常世物語　前板三巻翻焼の後 外人補綴の本也 全五巻

○御顔の白くなる仙女香 代 [illegible] 江戸京橋南傳馬町三丁目 [illegible] 坂本氏製

家傳神女湯　婦人ちのみち 諸病の妙やく　一包代百銅

精製奇應丸　大包代金弐朱 小包代五卜 中包代 [illegible] 五卜

熊胆黒丸子　一包代五卜

虫の妙薬　[illegible]

製薬 神田明神下同朋町東よこ丁　瀧澤氏

弘所 元飯田町中坂下南側よもの向　たき沢氏

天保三年歳次壬辰春正月吉日發行

大阪心齋橋筋博労町　河内屋茂兵衛

江戸大傳馬町二町目　丁子屋平兵衛

# 繍像復讐石見英雄録　全部五十冊

南海　玉藻主人　編輯

浪花　一勇斎歌川芳梅　画

○初編七冊　京師人作　○二編　玉藻主人嗣著　○三編　泉昜子嗣著　○第四輯以下作者一家

永録天正の頃筑紫名嶋の勇士岩見重太郎橘兼李が生立より武者修行せし一世の武功大蛇の害を除き老狸の妖を鎮め勇威を施め後ゝ天の橋立において廣瀬成瀬大川ら三人の大敵を撃て父兄の怨恨を晴し終に室町殿に奉仕て任官し給ふ木王水正に蟠れる書間に宮埜挙豪が妖邪淫婦岩瀑孝女新月ほかつ給ひ黨の五雄と称せる勇士の列伝霊猿悪魚の怪説ほか五輯よりハ益入佳境新話あり

浪花書肆

南久寶寺町心斎橋北ヘ入

伊丹屋善兵衛板